

メガネ

入江 礼子

保育中にメガネをかけていることは、なんともはや鬱陶しい。動きが激しいので、すぐにずり落ち、鼻メガネになるし、夏は汗が吹き出し、暑くてたまらない。ところが、テキパキと動き回るには邪魔なメガネも、ふと思いがけないことで、子どもたちとの絆を結ぶきっかけになることがある。ここでは私が今までに体験した例を一、二挙げてみようと思う。

まずK君とのこと。私が初めて自閉的な傾向を持つ子どもたちも受け入れている幼稚園に実習に行った時、なんと目もあまり合わないといわれている彼がジーンと私の顔を見るのである。私は何が何やらよくわからなかったが、ともかく目を合わせてくれること自体が嬉しくて、彼が好きなピョンピョンはね（体をピョンピョンはねさせて踊ることをいっしょにやったり、砂をサラサラ落したり、穴に砂を入れたりして遊んだ。以後、週に一度行く度に、必ずジーンと私の目をみてくれるのである。私は目が合わないなんて何かの間違

いではないかと思った。そして相変らずピョンピョンはねなどをいっしょにしていた。

ある日のこと、いつものように彼は私が行くとジーンと私の目を見る。丁度その時である。風で舞った砂ぼこりが私の目の中に入ってしまった、痛いのでメガネをはずすと、何とK君の視線も、私の手に持ったメガネの動きにつれて動くではないか。おかしいと思い、メガネを右に左に移動させると、やはりK君の目はそれを追っているのである。つまり今まで私がK君の視線が合っていたと思っていたのは、大きな間違いだったのである。K君は私のメガネに映る自分の顔や、まわりの景色を、まるでテレビの画面に見入るがごとくに見ていたのである。私はそれに気付いた時、かなりがっかりした。しかし、幸いなことに、誤解がきっかけになったとはいえ、その時には既に私もK君と他のことでも遊べるようになっていた。つまり気づかぬうちに、メガネがきっかけとなってレポートが成立していたのである。このことは、今ま

で鬱陶しいだけだったメガネも保育の中ではヒョんなことから役に立つことを知らせてくれたわけである。

もう一つ、T子ちゃんのこと。彼女とは、愛育研究所の家庭指導グループで知り合った。入園当初、彼女はともかく隅っこへ行ってしまうか、人に背を向けてお人形さんなどと遊んでいた。私は何とか彼女と結びつきを持ちたいと思い、つかず離れず彼女の様子を見守っていた。彼女はあまり自分から体を動かすのは得意ではない。しかし大人にグルグル回しをやらせてもらうのは大好きらしいことがわかり、以後しつこいくらいに抱き上げてはグルグル回しをしていた。抱っこをすると、彼女と視線の高さが同じになる。ところが同じになっても最初のうちは、ほとんどこちらの方に見向きもしてくれなかった。しかし、私がずり落ちかけたメガネをよいしょと元の位置に戻した時、急に彼女はメガネの存在に気づいたのか、一時、それに見入った。(この頃の私は、もう子どもたちが目を見てくれているのか、メガネをみているのか区別がつくようになっていた。つまりそれほどメガネに興味を示す子どもが多いのである)そして私の目からメガネをはずし、なんと彼女自身の目にかけてやうとするのである。それも

上・下逆にかけるのである。しばらくして、私に返してくれ、まがりなりにも私の顔にかけてくれるのである。それを何回も繰り返す。以後グルグル回しのあとは、しばらくメガネのやりとりをして遊ぶことが続いた。

何か月経つたらうか。ある時突然、彼女はメガネのやりとりをしつつ、ニコニコと、とってもいい顔で笑ったのである。この頃は、メガネ遊びだけでなく、メガネという道具を使わなくても大人と二人で、倒しっこ(ボンと押しでは倒れるギッタンパソコンのような遊び)のような遊びが出来るようになっていった。そんなふうに一人遊びのみではなくて、相手といっしょに遊べるようになるキッカケを、偶然メガネは果たしてくれたのである。

このようにメガネは対人関係が出来あがる前段階のキッカケの役割を果たしてくれることが多いのである。

仕方がない、これだけ多くのメリットをもたらしてくれるメガネである。これからも、多少鬱陶しくとも、醜くなるうとも、保育中は仲良く鼻の上に住まわせねばるまい。